

〈無量寿経〉梵本の往観偈について ——阿弥陀仏の原語問題との関係から——

岩 松 浅 夫

I

筆者は、かつて阿弥陀仏の原語問題について触れ、言及したことがある¹⁾。今、ここでその点について詳しく説明しているではないが、そこにおける筆者の主張の要点についてだけ述べるとすれば、この仏名の「阿弥陀」の部分には、これ迄多くの学者によってそう考えられてきたような（サンスクリットの）*amitāyus-* や *amitābha-*、若しくは *amita/amida* <*amṛta-* (or *amita-*) の如きではなくて、*amṛda* <*amṛta-* のような原語の形を写そうとしたものではないかということであった。ともあれ、その後しばらく筆者はその問題からは離れていたのであるが、近時あることが契機になって再び同じ課題に立返ることとなり、主にサンスクリット本を中心に再検討を試みてきたところが、新たに気付いたことがいくつかあった。そこで、ここではそのような中から特に「往観偈」に関係したことがらを選び、それについて述べてみたい。

II

さて、〈無量寿経〉には、周知のように、最古の『大阿弥陀経』を別にすれば、いくつかの偈が見られるわけであるが、それらの中で、阿弥陀仏の名が現れるのは所謂「往観偈」（「東方偈」とも）においてのみである。そして、実は問題はその「往観偈」中のこの仏の名の現れ方にあるわけなのであるが、その問題に入る前に、ここで念のために該偈におけるその仏名の現れ方について見てみると、まず漢訳では、偈を有する中では最古訳の『無量清浄平等覚経』及びそれに続く『無量寿経』の両経ではともに6度ずつ——ただし、見方によっては、前者は7度——現れしかもいずれも「無量」とされているのに対して、それらに比べるとかなり後代の訳出になる『無量寿如来会』と『大乘無量寿莊嚴経』の二経では、前者は1度、また後者も2度だけと回数こそ少ないものの、いずれも「無量寿」

となっている——その点、この後者の用例は(回数は別にして)後述のサンスクリット本と同じとも見得よう——ことが知られる。次にチベット訳本では, *tshe dpag med (pa)* = *amitāyus-* が4度に対して *ḥod dpag med* = *amitābha-*²⁾ も2度程見られ、異なった二つの名が並行して用いられていることになるが、この点は同本だけの特徴と言ってよいかもしれない。

Ⅲ

ところで、以上のようなことを念頭に置いた上で、次にサンスクリット本(以下、梵本と略)について見てみると、梵本では、この仏の名は全21偈中の第1, 2, 3, 4, 11, 17の各偈に計6度程現れるわけであるが、そこでは専ら *amitāyus-* だけが用いられて、*amitābha-* は全く見られない³⁾ ことが知られる。ただし、その *amitāyus-* もサンスクリット形そのままではなくて、語幹末の *s* を欠くというやや崩れた形で現れているわけであるが。ともあれ、そのようなこと自体は特にそれ程異とする程のことではないにしても、ここでやや不思議と言うか奇異に思われるのは、現行の二種ある刊本について言えば、特に最古の写本に基いたとされる足利本において、その *amitāyu* なる語と並んで *amita-āyu* というやや奇妙な語形が(同時に!) 用いられているということである。しかも、問題は実はそれのみに留まらず、この一見奇怪な? 語形を含む偈の部分のみが、韻律 (*metre*) 的に他と大きく異なり、若しくは不調になっているということである。因みに、この語形は第2, 4の二偈に都合2回現れるわけであるが、それら兩偈は、文中の一語を変えただけで他は殆ど全同といった類のものである。そして、実際には、その兩偈というのは、それぞれ次のような言表のものになっているのである(参考のため、*amitāyu* の語を含む他の詩句 = *pāda* も一緒に掲げておく)。

〈足利本〉

bahupuṣpapuṭān gṛhītvā|
nānāvarṇa surabhī manoramān|
okiranti naranāyakottamam|
amita-āyu naradevapūjitaṃ ||2||
bahugandhapuṭān gṛhītvā|
nānāvarṇa surabhī manoramān|
okiranti naranāyakottamaṃ|
amita-āyu naradevapūjitaṃ ||4||

〈Oxford本〉

buhupuṣpapūṭī gṛhītvā|
te nānāvarṇaṃ surabhī manoramāṃ|
okiraṃti naranāyakottamaṃ|
amitāyu naradevapūjitaṃ ||2||
bahugaṃdhapūṭī gṛhītvā|
nānāvarṇa surabhī manoramāṃ|
okiraṃti naranāyakottamaṃ|
amitāyu naradevapūjitaṃ ||4||

saṃbodhisattvā <i>amitāyu</i> nāyakaṃ (1d)	buddhāna kṣetrā <i>amitāyu</i> nāyakaṃ (1b)
saṃbodhisattvā <i>amitāyu</i> nāyakaṃ (3d)	sabodhisattvā <i>amitāyu</i> nāyakaṃ (3d)
smitaṃ karonti <i>amitāyu</i> nāthaḥ (11a)	smitaṃ karoti <i>amitāyu</i> nāthaḥ (11a)
<i>amitāyu</i> buddhas tada vyākaroti (17a)	<i>amitāyu</i> buddhas tada vyākaroti (17a)

IV

このようなことは一体何を表し、若しくは意味していると見るべきなのであるか。今、*amita-āyu* なる語形を有する第 2, 4 の両偈のみが韻律的に他と大きく異なり、若しくは不調である旨のことを述べたわけであるが、ここで、この問題について若干の考察を試みってみるために、試みに同偈で用いられている韻律について調べてみると、まず、往観偈全体としては、基本的には所謂の *Triṣṭubh-jagati* によって構成されていることが知られる。ところで、該韻律の基本的なパターン(長短調)は ♪-♪---♪-♪---若しくは ♪-♪---♪-♪-♪- の如くであるから、この図式に先の第 2, 4 偈を当嵌めてみると、まず *amita-āyu* の語を含む第 4 詩句 (*pāda*) においては第 2, 5 の両音節は長音でなければならないのがそうなっておらず、またそれ以外の詩句においても、(Oxford 本の第 2 偈の第 2 詩句を別にすれば) いずれも句頭の? 音節数が 1 乃至 3 程度不足するなど、どの部分(詩句)を取って見ても、同律の要求には合致していないことが知られるわけである。

さて、それでは、このような極めて大きな韻律上のズレ乃至不調という点からすると、この両偈の場合には、ともに別の韻律(による作詩)を考えるべきだということになるのであろうか。実際、そのような観点に立って改めて両偈の韻律について見てみると、*amita-āyu* の語を含む第 4 詩句はともに *Vaitāliya* の第 4 (偶数) 詩句に合致することが知られ、またそれ以外の詩句についても同律のものと見ることも必ずしも不可能ではないようであるから、偈全体としてもそのように、つまり *Vaitāliya* で表されていると見る⁴⁾ ことも或いは可能なように思われるかもしれない。しかし、果してそう見ることによって問題が全て困難なく解決が着くのかと言えば、筆者には、それによっても問題は決して解決しないどころか、却って新たな困難や難問を背負い込むことにもなるのではないかと思われてならないのである。と言うのも、例えば、もしこの *Vaitāliya* の韻律がこれら本来のものであったとすると、この両偈の場合にのみ他とは異なってそのような韻律が使われたということになるわけであるが、一方、この〈無量寿経〉の梵本で

は、冒頭の序偈（帰敬偈）と末尾の「縁起法頌」の場合を別にすれば、偈は都合5箇所それぞれ纏って説かれているわけであるが、それら一纏りの偈頌の中で異なった韻律が見られるのは所謂「流通偈」においてのみであって、しかもその「流通偈」の場合にも、韻律の相違は初めの2偈が śloka で後の残り8偈は Triṣṭubh-jagati といった程度のもに過ぎない、ということがあるからである。つまり、このようなことをもとに言えば、この「往觀偈」においてのみ異なった韻律を交互に——しかも、最初の2回だけ！——配して作詩されたなどするのは、極めて不自然なのではないかということである。のみならず、それが他の場合とは異なって、amita-āyu なる一種異様な？語形を使って迄なされたとするれば、なおさらのこと。それとともに、またもう一つには、もしそれら両偈の韻律を Vaitāliya と見るにしても、そのままつまり刊本の読みのままではまだ韻律的に不調な部分や箇所は依然として残るわけであって、しかもそのようなものの中には、小手先だけのおざなりな解決法程度のことでは済まない、もっと深刻で致命的な問題が隠されているようにも思われるからである。例えば、仮に該 Vaitāliya の韻律を前後に分けて前半を opening 部、また後半を cadence 部とも呼ぶことにすれば、前半の opening 部は奇数詩句では 6 mora でまた偶数詩句では 8 mora の音量（長さ）に、また後半の cadence 部は -u-u- のような型（長短調）になるわけであるが、この図式を同様に上の二偈の各詩句に当嵌めて見ると、偶数詩句ではそれ程問題ない⁵⁾にしても、奇数詩句の場合には、まず第1詩句では cadence 部の最後の1音節相当分の音量＝音節の不足が見られるとともに、また第3詩句においても opening 部が 8 mora になっている等のことがある、これらはいずれも例えば母音の長短の手直しといった程度の簡単な修正などでは片が付かない、そんな単純な問題などではないのではないか、ということである。

このように見来ってくるならば、本偈における問題のあり方も、自ずから明らかになってくるのではないであろうか。すなわち、筆者は、この一見 Vaitāliya と解せなくとも思われるこれら両偈の韻律ももともとは他と同じように Triṣṭubh-jagati で表されていたものであって、それがあつた事情乃至理由の許に、このように改められたのではないかと考える、というわけなのである。更に言えば、このようなことも実はこの偈（往觀偈）で仏名の改変・変更が行われたために生じたものであって、両偈のみに現れる amita-āyu なる奇妙な？語形も、実はそのような改変に伴って、恐らくは——改変者の力量の問題などもあって？——已むを

得ないという形で、作り出されたものではないかと考える、ということである。そうして、そのように見、また捉えることによるのみ、これら両偈を巡るさまざまな問題についても、ある程度納得いく説明も可能になるのではないかと考えるのである。では、その改変される前の名一語形はどのようなものであったかと言えば、それは、既にⅡにおいて確認しておいたように、『平等覚経』や『無量寿経』で「無量」と訳されていたそれに対応する *amita* の如きものを想定してやるのが自然ではないか、ということである。

さて、それでは実際に該偈の *amita-āyu* を *amita* へと変えて、しかもそ(れら)の言表一言を *Triṣṭubh-jagati* の韻律に合致する——抵触しない——ように改めたりすることは、果して本当に可能なのであろうか。その点について確認しておくことも、或いは必要かもしれない。そして、この問題に関しては筆者は、そのようなことも決して不可能ではあるまいと考えるのである。例えば、後掲のような形の文一詩句を考えてやれば、そういった要求にも十分応え得るのではないかというわけである。と同時にまた、もしそうとすれば、残る一方の *amitāyu* の方についても、これも当然同じように *amita* から変えられたものと見ることになるわけであるが、この場合も同様に、該律の許容の範囲内で、*amita* に還元することは必ずしも不可能ではないと考えるのである。例えば、これも後掲のような形のを想定してやれば、さして問題あるまいというわけである。

V

ところで、こうして〈無量寿経〉梵本の「往観偈」に現れる *amita-āyu* 若しくは *amitāyu* なる語がともに同偈本来のものではなくて、もとの恐らくは *amita* の如き語から変えられたものとする、では、そのもとの語の表す意味についてはどうなるのであろうか。この語(形)は、サンスクリットそのままと見て、先の『平等覚経』や『無量寿経』などに従って「無量」の意に解すべきなのであろうか。最後に、その問題について触れておきたい。そして、これに対する筆者の意見を前もって述べるならば、筆者は、この語はサンスクリットそのままではなくて、実は *amṛta-* の転訛したもの(語形)を表しているのではないかと考える、ということである。と言うのも、筆者がそのように推測し判断する理由はある意味では非常に単純なのであるが、サンスクリットとしての *amita-* は単に「無量の」「数えられない」等を意味する形容詞であって、限定されるべき「何が」という語が示されない限りは、それだけでは——特に仏名として見た場合——それ

程意味をなす言葉とは思われぬからであって、しかもその一方で *amṛta-* の方については、この語は名詞として「甘露」「不死」等を意味するのみならず、実際に仏名としても用いられ、就中その語形についても、所謂のガンダーラ語 (*Gāndhāri*) の一種においては、*amita/amida* の如くなり得た可能性も多分にあった (と認められる)⁶⁾ わけであるから⁷⁾。

ともあれ、ここで最後に上記諸偈の各詩句に対する筆者の補正案を掲げて、取敢えずは本稿を終えることにしたい (イタリックの箇所が、筆者が補い、若しくは修正を試みた部分)。

<i>pāṇibhya bahupuṣpapuṭān gṛhītā </i>	<i>pāṇibhya bahugandhapuṭān gṛhītā </i>
<i>te nānavarṇān surabhīn manoramān </i>	<i>te nānavarṇān surabhīn manoramān </i>
<i>samokirantī naranāyakottamam </i>	<i>samokirantī naranāyakottamam </i>
<i>taṃ amita-buddhaṃ naradevapūjitaṃ 2 </i>	<i>taṃ amita-buddhaṃ naradevapūjitaṃ 4 </i>
<i>saṃbodhisattvā amitaṃ hi nāyakam (1d)</i>	<i>saṃbodhisattvā amitaṃ hi nāyakam (3d)</i>
<i>smitaṃ karoti amita-lokanāthaḥ (11a)</i>	<i>sa amita-buddhas tada vyākaroṭi (17a)</i>

- 1) 拙稿「阿弥陀仏の原語について——『大阿弥陀經』の音写漢字から見た「阿弥陀」の原語考——」『仏教学』第4号、昭和52年、参照。
- 2) *ḥoḍ dpag med* は *amitaprabha-* に対しても用いられているが、この対応例については、ここではもちろん除外して考える。
- 3) 実は、第10偈に一度 '*amitābhasya*' なる語形も見られるのであるが、韻律上も、また文意の上から言ってもここは *amitāsyā* の方がよく、実際にまた榊写本 (足利本の底本) でもそのようになっている。したがって、本稿でもこの語はそのように読む (改める) ことにする。
- 4) この点に関しては、阪本 (後藤) 純子氏より御教示 (示唆) を頂いた。同氏には謝意を表したい。
- 5) 両偈とも、第4詩句は *Vaitāliya* のそれになっており問題ないが、第2詩句についても、*nānā⁹* を *nānā⁹* の如く改めてやれば、該韻律に合致する。
- 6) この点に関しては、拙稿「[無量]と[甘露]」『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』春秋社、昭和57年所収、参照。
- 7) このことは、阿弥陀仏の直接の、つまり「阿弥陀」という音写語の (直接の) 原語が *amita* (若しくは *amida*) であったということ迄を言おうとするものでは決してない。筆者は、注1)の拙論で述べたように、「阿弥陀」の3字は飽く迄 *amṛda* < *amṛta-* の如き原語の形を写 (そうと) したものであるのではないかと考えている——この点は、今も変わらない——ので、そのことを特にお断りしておきたい。

〈キーワード〉 阿弥陀仏の原語, 往觀偈, 韻律, *amita-āyu*, *amṛta-*

(東方研究会専任研究員)